



文化財愛護
シンボルマーク

むこう やま にし 向 山 西 遺 跡

2006年3月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団



むこう やま にし 向 山 西 遺 跡

2006年3月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例　　言

1. 本書は、有限会社 松雲土木の依頼を受けて、松江市教育委員会と財団法人松江市教育文化振興事業団が平成16年度に実施した（仮称）古志原南団地造成工事に伴う向山西遺跡発掘調査の報告書である。

2. 調査の組織は下記の通りである。

依頼者	有限会社 松雲土木
上体者	松江市教育委員会
事務局	松江市教育委員会
	教 育 長 山 本 弘 正
	文化財課 課 長 岡 崎 雄二郎
	係 長 飯 塚 康 行
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団
	理 事 長 松 浦 正 敏
	専 務 理 事 田 中 寿美夫
	事 務 局 長 長 野 正 夫
	調 査 係 長 濑 古 謙 子
	嘱 託 員 陶 山 隆

3. 調査の実施及び報告書の作成にあたっては、下記の方々より多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。（順不同）

東森 春（島根県教育庁）、西尾克巳（同）、阿部賢治、伊松雲土木

4. 調査参加者は下記の方々である。

〔現地調査〕阿部賢治、石倉春枝、岡 礼二、小川真由美、杉原 正、杉原文子、時安順子、

福田澄江、細田信子、細田勇治、向井伸夫、吉岡永子、渡部孝次

〔遺物整理〕飯野正子、中谷美枝子、松尾澄美

5. 本書挿図中の方位は第Ⅲ座標系の袖方位、レベルは海拔高である。

6. 本書で使用した遺構記号は、以下の通りである。

P…ピット、S I…堅穴住居跡、S K…土壙、S D…溝

7. 本書の作成には主に以下の者が携わった。

〔遺物の実測〕廣瀬貴子、苦家幸子、高尾万里子、井上喜代女

〔造構・遺物の浮遊〕時安順子、飯野正子、松尾澄美、北島和子

〔写真撮影〕陶山 隆、廣瀬貴子、石川 崇、瀬古謙子

〔執筆・編集〕瀬古謙子

8. 出土遺物・実測図面・写真等は、松江市教育委員会で保管している。

目 次

I 調査に至る経緯と経過	1
II 遺跡の位置と歴史的環境	2
III 調査の概要	5
1. 基本層序	6
2. 検出した遺構と出土遺物	6
(1) 弥生時代の遺構	6
① 竪穴住居跡 1 (SI-01)	6
② 竪穴住居跡 2 (SI-02)	10
③ 加工段	10
(2) 中世の遺構	11
① SK-01	11
② SK-02	11
(3) 時期不明の遺構	12
① SK-03	12
② SK-04	12
③ SK-05	12
④ 溝状遺構（道路状遺構）	14
⑤ 焼上壙	14
(4) 遺構外の出土遺物	14
IV 結 び	15
遺物観察表	16

挿図図版目次

第1図	松江市位置図	
第2図	向山西遺跡位置図	1
第3図	周辺の遺跡	3
第4図	向山西遺跡調査区位置図	4
第5図	向山西遺跡調査成果図	5
第6図	SI-01実測図	7
第7図	SI-01出土遺物実測図	8
第8図	SI-02実測図	9
第9図	SI-02出土遺物実測図	10
第10図	加工段実測図	11
第11図	加工段出土遺物実測図	11
第12図	SK-01・02実測図	12
第13図	SK-01・02出土遺物実測図	12
第14図	SK-03・04・05実測図	13
第15図	溝状遺構（道路状遺構）実測図	14
第16図	焼土堆実測図	14
第17図	遺構外出出土遺物実測図	14



第1図 松江市位置図

写真図版目次

- 図版 1 向山西遺跡遠景
同 上 近景
- 図版 2 向山西遺跡調査後
SI-01全景
- 図版 3 SI-01平面プラン検出時
SI-01堆積上層
- 図版 4 SI-01堅体溝・ピット検出時
SI-01屋外への排水路検出時
SI-01屋外への排水路縦断の土層断面
- 図版 5 SI-01屋外への排水路横断の上層断面
SI-01内遺物出土状況
SI-01堅体溝と屋外への排水路の連結地点
- 図版 6 SI-02平面プラン検出時
SI-02全景
- 図版 7 SI-02堆積上層断面
- 図版 8 SI-02埋土上層の炭・焼土
SI-02中央ピット検出時
SI-02中央ピット堆積上層断面
- 図版 9 加工段全景
加工段溝内遺物出土状況
- 図版10 SK-01（中世墓）半掘時
同 上 出土遺物
SK-02（中世墓）半掘時
- 図版11 SK-03（落とし穴）
SK-04（落とし穴）
SK-05（落とし穴）
- 図版12 溝状遺構（道路状遺構）
焼土塊
現地説明会
- 図版13 SI-01・SI-02・加工段出土遺物
- 図版14 SK-01・SK-02・遺構外出土遺物

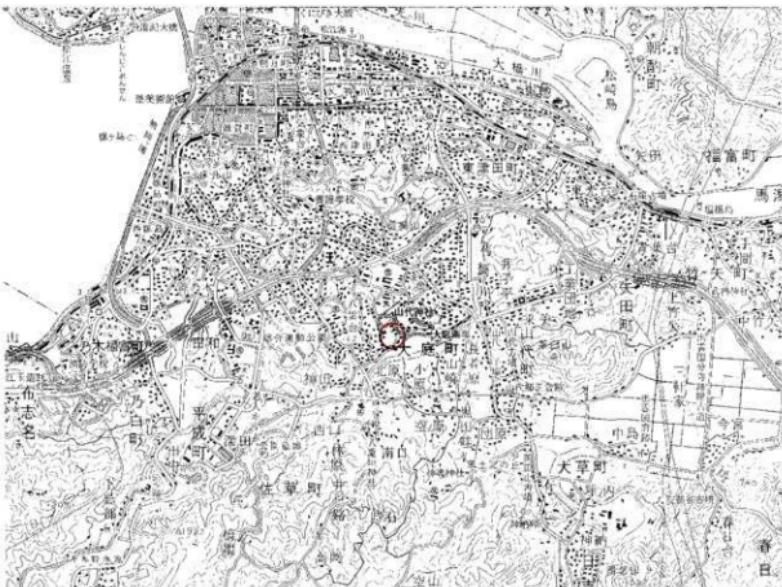
I 調査に至る経緯と経過

向山西遺跡は松江市古志原7丁目1770-1に所在する。標高38m余りの丘陵頂部に位置し、現況は山林である。

民間開発事業者による宅地造成計画に伴い、平成13年10月に松江市教育委員会が開発対象地の試掘調査を実施したところ、丘陵頂部のトレンチ2ヶ所から弥生時代のものと思われる竪穴住居跡が各1棟づつ発見されたため、造成工事の計画が変更され、丘陵頂部を除く区域の開発が行われた。遺跡の発見された丘陵頂部は土地の字から「向山西遺跡」と命名された。

その後、布松雲上木により向山西遺跡を西端に含む山林一帯に宅地造成が計画された。これに伴い平成16年5月に試掘調査を行ったが、向山西遺跡を除く山林部分に遺跡は発見されず、丘陵頂部のみを対象に平成16年度事業として発掘調査を実施することになったものである。

現地調査は平成17年1月4日に着手、竪穴住居跡他の遺構を検出した後の3月2日に島根県教育委員会の現地指導を受け、3月13日に降雪の中一般市民を対象に現地説明会を開催、3月16日をもって終了した。調査面積は570m²、調査に要した日数は計35日である。



第2図 向山西遺跡位置図（1：50,000）

II 遺跡の位置と歴史的環境

向山西遺跡（1）は松江市南郊の古志原7丁目1770-1に所在する。遺跡のある丘陵頂部は標高38mを測り、東西に分布する段丘面上に立地している。段丘面は遺跡付近を残して南側を除く三方ともほぼ開発し尽くされた感があり、いくつもの団地が形成されている。東方には茶臼山を望み、その西斜面に発達した台地上には集落が発達し遺跡も数多くある。北側には古志原小学校、県立松江工業高校があり、西側には団地を挟んで松江総合運動公園とその隣接丘陵が広がる。南側は馬橋川の流れる木田地帯が眼下に広がり、その向こうには東西に伸びる山塊から北に向かって派生した何本もの低丘陵上に人家が営まれている。

周辺の遺跡について時代を追って概観してみると、まず旧石器時代の剥片や石核などの接合資料が出土した下黒田遺跡（20）、縄石核が見つかった市場遺跡（16）がある。

縄文～弥生時代の遺跡は石錐などの石器が出土した上乃木の下沢遺跡（39）、集石状造構やカ跡状造構と共に縄文土器や弥生土器の出土した馬橋川下流の石台遺跡（13）などがある。本遺跡の近辺では香ノ木池遺跡（2）や山代神社前遺跡（49）で石錐が採集されている。

弥生時代の遺跡として著名なものに国史跡に指定された出和山遺跡（46）がある。前期には尾根を除く三方に緩やかな堀を設け、中期には三重に環壕を廻らせた祭祀遺跡である。通常の環濠遺跡と異なり、集落は環濠の外に営まれている。友田遺跡（43）は田和山に關係の深い遺跡として注目され、前～中期の七墳墓群、中期の墳丘墓群、後期前半の四隅突出墳丘墓が調査されている。後期後半の四隅突出墳丘墓には来美墳墓（12）、間内越墳丘墓群がある。集落遺跡は石台遺跡、忌部川下流の欠田遺跡、茶臼山東の意宇平野に中期の布田遺跡などがあるが今回の調査地からはかなり距離がある。

古墳時代の前期から中期には意宇平野の北側から大橋川沿いに大形古墳が造られるが、後期になると茶臼山北西麓の台地上に大庭鶴塚（5）、山代二子塚（6）、山代方塚（7）、永久宅後古墳（8）などの大形首長墳が次々と造営される。これらの歴代首長墓のある台地から西に伸び向山西遺跡に至る丘陵上にも方墳と前方後方墳からなる向山西古墳群（3）や石棺式石室を持つ向山1号墳（4）が築かれる。さらに西の運動公園内には中期の奥山古墳群（36）、その北側に初期須恵器を出した長砂古墳群（38）、後期前半の木二子塚（40）等があり、また南側山塊の北麓から低丘陵上には荒神谷・後谷古墳群（27）、小倉見谷（28）、菅沢谷（30）などの横穴墓群も存在する。この時期の集落は山代、大庭の古墳周辺には調査例が無いが、運動公園隣接丘陵上の渋ヶ谷遺跡（34）で確認されており、また同所では集落に先行する5世紀末と6世紀前半の須恵器窯跡が発見されている。

意宇平野に出雲國府が置かれた奈良時代の遺跡は山代郷正倉跡（15）、山代郷南新造院（四王寺）跡（17）、四王寺の瓦窯である小無田Ⅱ遺跡（18）、来美庵寺（11）などが茶臼山の北西から南西麓にかけて所在する。

中世の遺跡で知られるものは七星を持つ黒田館跡（19）、茶臼山城跡（14）などである。



- | | | | |
|------------|-------------------|---------------|-------------|
| 1. 向山西道跡 | 14. 茶臼山城跡 | 27. 荒神音・後谷古墳群 | 40. 乃木二子塚 |
| 2. 香ノ木池遺跡 | 15. 出雲山代郷正塚跡 | 28. 小倉山古墳群 | 41. 二子塚古墳 |
| 3. 向山西古墳群 | 16. 市場遺跡 | 29. 装尻遺跡群 | 42. 向原古墳群 |
| 4. 向山1号塚 | 17. 山代郷南新造説(四王寺)跡 | 30. 香沢谷古墳群 | 43. 亥田遺跡 |
| 5. 大庭塚 | 18. 小無田Ⅱ遺跡 | 31. 大久保古墳群 | 44. 南友田遺跡 |
| 6. 山代二子塚 | 19. 黒田餘跡 | 32. 横舟古墳跡 | 45. ニツ鹿手遺跡 |
| 7. 山代方塚 | 20. 下黒田遺跡 | 33. 萩田遺跡 | 46. 田和山遺跡 |
| 8. 永久宅後古墳 | 21. 東洞寺古墳 | 34. 法々谷遺跡 | 47. 田和山古墳群 |
| 9. 井手平古墳群 | 22. 黒田城遺跡 | 35. 神田遺跡 | 48. 向雲神古墳 |
| 10. 狐谷横穴墓群 | 23. 四原古墳 | 36. 舟山古墳群 | 49. 山代神社前遺跡 |
| 11. 來奧殿寺 | 24. 岡田山古墳群 | 37. 岩山遺跡 | |
| 12. 來美培墓 | 25. 宮屋後古墳 | 38. 長砂古墳群 | |
| 13. 石台遺跡 | 26. 出雲国造経跡 | 39. 下沢遺跡 | |

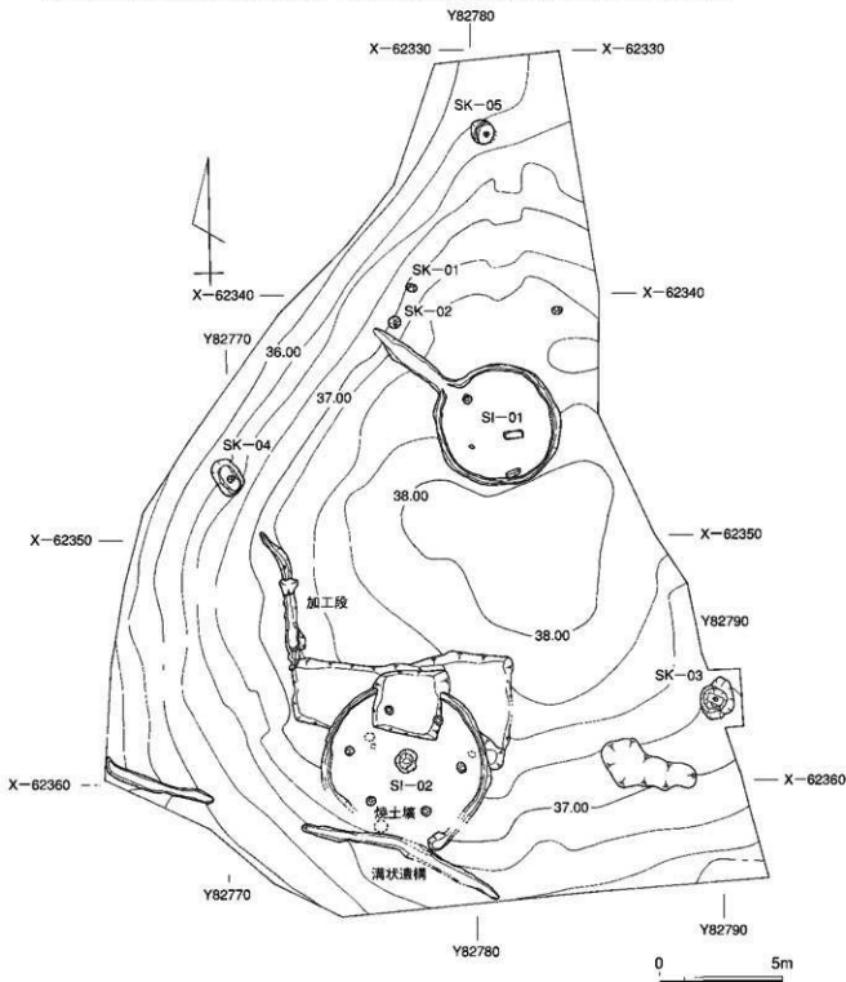
第3図 周辺の遺跡 (1 : 25,000)



第4図 向山西遺跡調査区位置図

III 調査の概要

調査の結果、弥生時代後期初頭の竪穴住居跡2棟と加工段1箇所、中世墓と思われる土壙2基、時期不明の落とし穴3基、焼土壙1基、山道と思われる溝状遺構1条を検出した。(第5図)



第5図 向山西遺跡調査成果図

1. 基本層序

表土の下には厚み10~20cmの褐色系統の堆積土があり、地山に至る。褐色上面に遺構はなく、褐色土中に少量の弥生土器片、須恵器片、磁器片が含まれていた。

遺構はすべて地山面より検出した。

2. 検出した遺構と出土遺物

(1) 弥生時代の遺構（竪穴住居跡2棟、加工段1箇所）

① 竪穴住居跡1(SI-01) (第6図)

立地・形態・規模 丘陵最高所のやや北側に降った平坦面で検出した円形の竪穴住居跡である。上端径5m、下端径4.8m、壁高22~34cmを測る。床面の標高はmである。硬く締まった黄灰色の地山にしっかりと掘り込まれている。住居北西部には壁体を穿って屋外への排水路が付設されている。

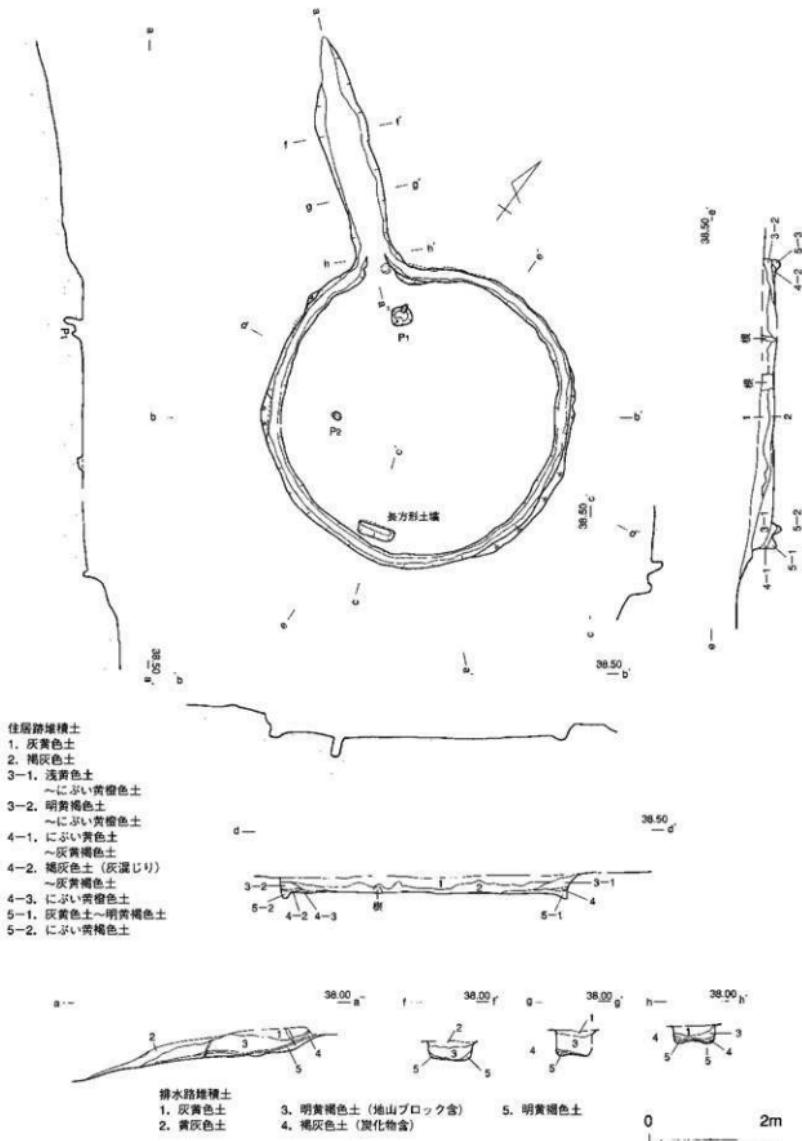
覆土 第1層は表土下の灰褐色土層で、遺跡地全域に分布する褐色系統の堆積土と一連のものであるが、窓地に堆積した分暗色を呈している。磁器片、須恵器小片などを含む。第2層は第1層より一層暗い褐色上層で、弥生土器片が出土した。第3層は明黄色系の堆積土で住居跡上端付近からの崩落土であり、ほぼ全局にわたって確認された。当然のことながら、山側からの流入が多い。第4層は壁体際に堆積した炭化物を多く含む薄い層である。鈍い黄色~黄褐色土層で、遺物の大半はこの層から出土した。第5層は灰黄色~鈍い褐色上層で、壁体溝内から床面上の一部に堆積し、南側には他の部分よりやや焼上が多く含まれていた。

柱穴 上柱穴の痕跡は不明瞭で、精査を繰り返してピット候補箇所の半掘を行ったが、大半は地山の口の間の軟質の部分にすぎず、ごく浅いP-1と杭穴のようなP-2を検出したのみであった。P-1の中にはP-2と同様の細いピットがあり、柱の支えだったとも考えられる。上柱は床に直に立てられていたか、数センチのごく浅い柱穴を精査の段階で削ってしまったのかもしれない。

長方形土壙 床面の南寄りに20×60cm、深さ20cmの細長い土壙が外傾して掘り込まれていた。その形態や角度から推測すると入口に掛けた段階子を固定した穴とも考えられる。

壁体溝 周壁の直下には壁体溝が一層し、北西の壁を穿って付設された排水路に合流している。壁体溝と排水路の連結地点は壁体溝の両方からの流れが排水路の中で合流するように中高に掘り残されY字状を呈している。壁体溝の形態は山頂側が浅く幅も狭い。排水路に向かってだんだんと深く幅広く掘られている。

排水路 住居跡北西部の壁体を穿ちまっすぐに伸びて3.6m付近で終わる断面長方形の素掘りの溝である。幅60~70cm、深さ最大40cmが残存する。底面には若干の凹凸があるが、壁体溝との連結部と北西部との比高差は40cmあり、排水はスムーズだったものと思われる。両壁、底面共硬い地山で、堆積層は基本的に住居跡内と同じ層序である。ただし、長軸セクションを観察すると第3層は連結部から1.4m付近に頂点のある不自然な堆積層である。1.4mよりやや内側の排水路両岸や蓋をしていたとすればその上部にもこの土の堆積があったことが推測されるため、当初住居を掘り込んだ際に出た排出土を周囲に積んで周堤をつくっていた可能性が大である。住居跡内の覆土を見てもこの層は山側であ

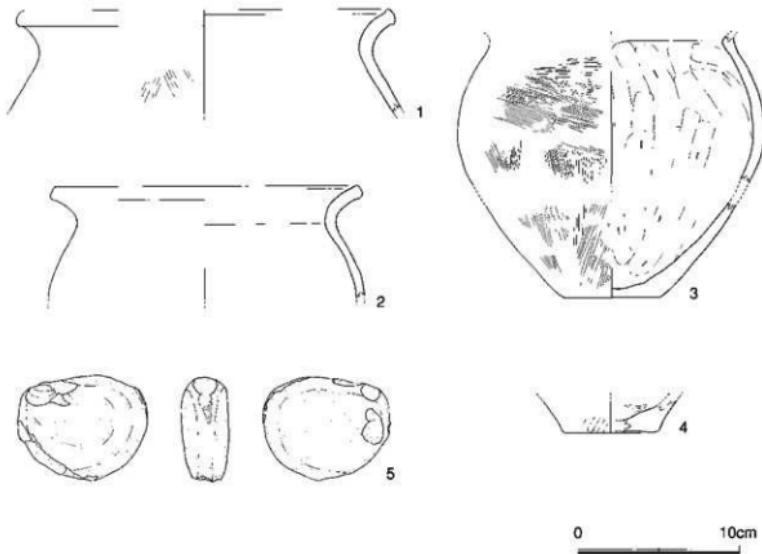


る南側に厚く谷側である北側に薄く堆積している状況であったが、同一の要因によるものと考えられる。第4層は排水路中程まで薄く堆積し、連結部ではまだ側壁下の両側が溝として機能し、g-g'付近では流れが東に片寄っていたことがわかる。

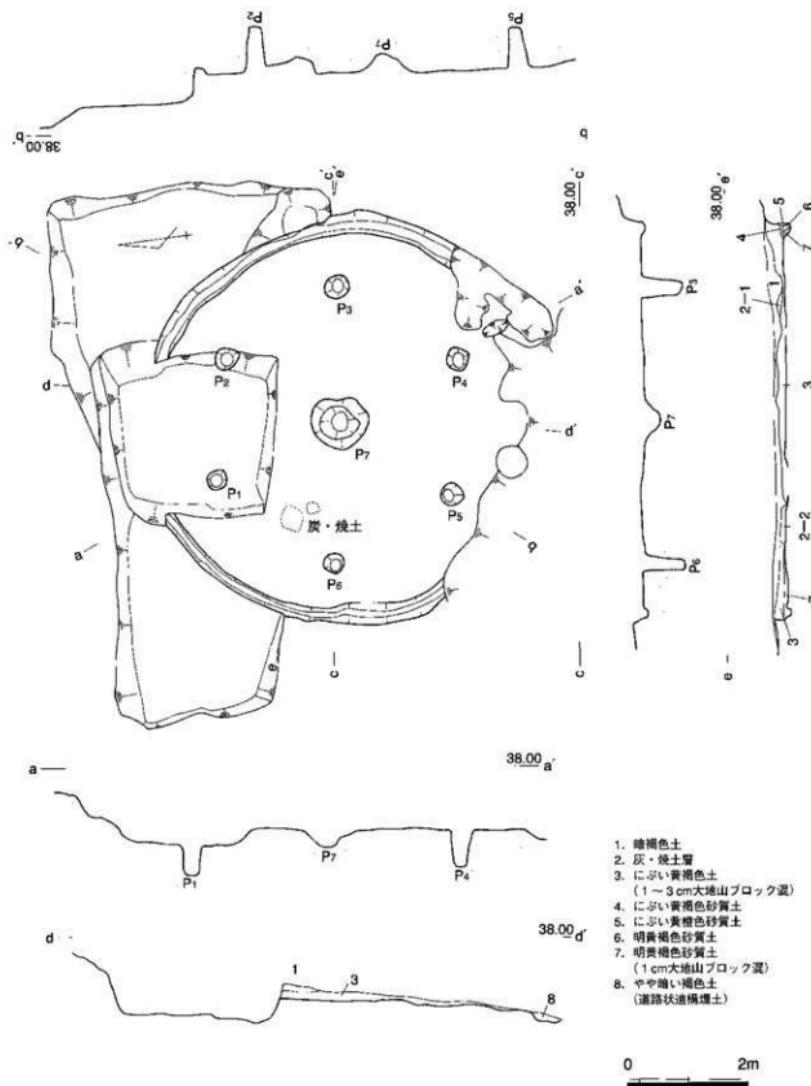
遺物の出土状況 遺物のほとんどは壁体際に堆積した第4層からの出土である。壁体溝と屋外への排水路の連結地点で第7図-1の甕が、東壁際で2と3の甕が、南壁際に張り付く様に5の磨石が出土した。住居跡中央部に堆積した第2層からも4の底部や弥生土器小片若干が出土している。

SI-01の出土遺物 第7図1、2は口頸部がくの字に屈曲する甕である。風化が著しく口縁端部の形状は若干の不正確さは否めないが、内傾していることは確かであり、上下の拡張は余りないものと思われる。端部に凹線文があったかどうかは確認できなかった。頸部内面の角度は甘い。内面頸部以下の調整は不明である。3は甕または鉢の頸部から底部である。頸部内面の屈曲は明瞭であり、外面は肩部がヨコハケ、胴部以下がタテハケで調整、内面は全体に縱方向のヘラケズリが施される。4は弥生土器底部小片、5は暗灰色のすべらかな石の一部を打ち欠き、持ち易く加工して磨石に使ったもので擦痕を残している。

時期 出土した弥生土器は風化が著しく調整や文様などの観察が困難であるが、頸部内面の角度が甘くなっていること、頭～胴部の残っている個体の頸部以下がヘラケズリされていることなどから後期初頭のものと判断される。これらの土器が出土した第4層は焼土や灰が混ざっている箇所もあり、壁際に掻き寄せたかのような状況であった。この層の堆積後にこの住居は廃絶したものと考えられる。



第7図 SI-01出土遺物実測図



第8図 SI-02実測図

② 穫穴住居跡2 (SI-02) (第8図)

立地・形態・規模 SI-01の南端からやや南北方向9mの地点に北端を検出した円形の竪穴住居跡である。上端径6.9m、下端径6.6m、壁最大高40cm、床面の標高37mを測り、かなり大形のものである。南側の一部は木の根による攪乱や土砂の流失により残っていなかった。

覆土 第1層は暗褐色上で住居跡の窪みに最後に溜まった層である。第2-1層は炭と焼土の混じった層で住居が廃絶し第3層堆積後の焚火の跡である。2-2層は床面上の炭と焼土部分である。第3層は鈍い黄褐色土に地山のブロックを含み、住居跡の上端から床面まで10~30cmの厚みで広く堆積している。SI-01と同じく周堤盛土からの流石であろうか。第4層以下は壁体溝内の堆積土である。

柱穴 上柱穴は6本あり上端径30~40cm、下端径20cm前後、深さ65~75cmを測る。埋土は第3層と同様のものと、地山ブロックは含むものの黄色味の少ない褐色土のものが見られた。柱痕跡は南東側のP-3、4で確認でき、直径は8~10cm大である。

壁体溝 南側部分が木の根による攪乱と床面の流失によって、北側の一部が試掘トレンチによって失われていたが、本来は存在していたものであろう。溝底面のレベルは西北部が最も高く、西南部が最も低い。東側はその中間である。このレベルから見て、壁体溝が排水の為のものであれば南側の屋外に排出していたものと思われるが、南端側は床面、壁体とも残っていなかった為確認することができなかった。またSI-01のように規模の大きな排水路を付設していれば現状でもその痕跡が残っているはずであるが、そういうものは認められなかった。

中央ピット 床面中央部に存在する2段掘りのピットである。上段の傾斜は緩く、下部は傾斜が急である。2段掘りの中央ピットの場合、木蓋が想定されることが多い。埋土の大部分は床面上を覆った第3層で占められ、底面上に柔らかい暗褐色の有機質腐植層が数センチ見られた。これらのことからこの中央ピットは貯蔵穴であった可能性が高い。

焼土 床面の北西側に2箇所見られた。

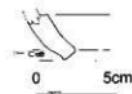
遺物出土状況 埋土上層と周辺から弥生土器片が少量出土した。

SI-02出土遺物 第9図は埋土上層から出土した弥生土器の脚部または台部と思われるものである。器種はよくわからない。端部より3cmほど上で段をなし幅広りになる。端部は平坦面をなし無文である。内面下部にわずかにハケ目が観察される。脚部としたのは外向の色調が暗褐色であるのに比べて内面が黒褐色を呈していることから、焼成時下向きになっていて火がまわらなかつたと判断されたためである。

時期 床面から出土した遺物がなく、また建物周辺からも形のわかる遺物が出ていないため決めて手に欠けるが、建物のほどよい位置関係からすればSI-01と同時期に存在していたとも考えられよう。

③ 加工段 (第10図)

立地・形態・規模 丘陵最高所から西にやや下がった地点に南北に長さ5.6mの溝を切り、その内側(斜面側)に残存幅2m余りの平坦面を設けたものである。平坦面に柱穴は見当たらなかった。

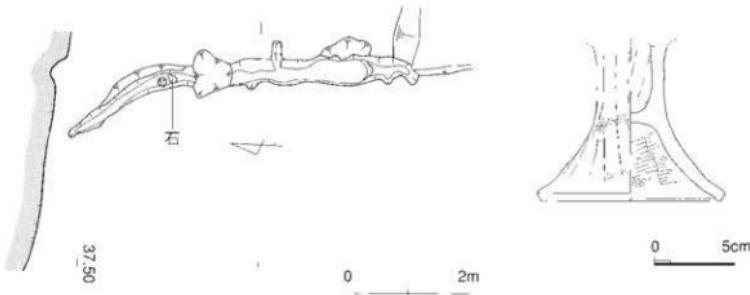


第9図
SI-02
出土遺物実測図

出土遺物 遺物は溝の中から高杯の脚部（第11図）が出土した。円筒状の脚筒部から脚端部へ緩やかに広がるものである。脚部中央付近に粘土を詰めて上下からおさえているが、断面で見ると厚みは1cmに満たない。筒部は中空で、内面には指でなでた跡が顕著に残っている。外面の調整は縦方向のペラミガキ、脚端部から充填粘土までの内面は板目によると思われるハケ目が観察される。

機能 柱穴ではなく、しっかりした建物があったとは考えにくい。溝が切ってある事から、水を嫌うごく簡単な施設、物置場所、作業場所などの用途が想定される。

時期 出土した高杯の脚部は筒部が中空の特異な形態のものである。筒部が詰まつたものは弥生中期にも後期にも見られるが、中空になったものは見かけないように思う。この遺跡で確認できる他の弥生土器は後期初頭頃のものであるので、同時期頃と考えておく。



第10図 加工段実測図

第11図 加工段出土遺物実測図

(2) 中世の遺構

① 土壙1 (SK-01) (第12図)

立地・形態・規模 SI-01の西側斜面で検出したやや不整な円形の小土壙である。直径は30cm、深さは15cmあり、底面は平らである。

出土遺物 鉄さびの付いたものを含む炭の塊が掌一本ほどと鉄の角釘8本が出土した。(第13図)

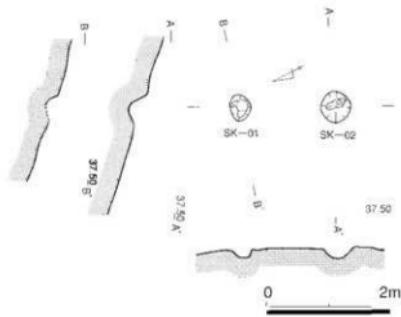
② 土壙2 (SK-02) (第12図)

立地・形態・規模 SK-01の南側1.5mの地点で検出した円形の小土壙である。直径は50cm、深さは20cmあり、底面は丸みを帯びている。

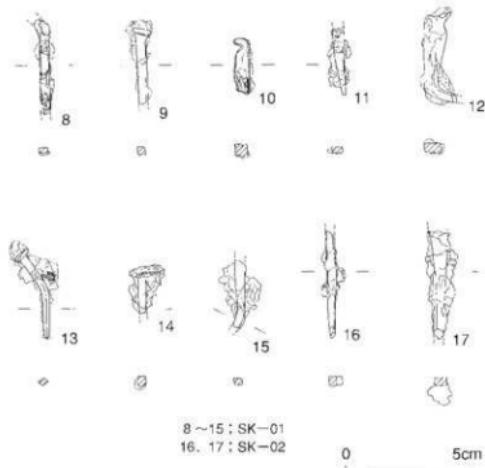
出土遺物 炭の塊少量と鉄の角釘2本が出土した。(第13図)

土壙1、2の性格と時期 いずれの穴も焼けた形跡はなく、穴の周辺にも炭は出なかった。他の場所で入れ物ごと焼いた後この場所に穴を掘って埋めたものと推定される。

八雲村谷ノ奥遺跡の例から中世墓ではないかと思われるが人骨は確認できなかった。



第12図 SK-01・02実測図



第13図 SK-01・02出土遺物実測図

(3) 時期不明の遺構

① 土壙3 (SK-03) (第14図)

立地・形態・規模 丘陵最高所からやや東南に降った調査地の端で検出した。上面形は不整であるが底面は長方形を呈し、底面の中央にはピットが穿たれていた。上端1.7×1.4m、底面65×38cm、深さ1.35m、底面のピット径15×20cm、深さ20cmを測る。

埋土 上層は炭や焼土の混じった暗褐色土、中層は地山のブロック(1~2cm大)を多量に含む鈍い黄褐色土、下層は地山ブロック(3~5cm大)を多量に含む鈍い黄褐色土が堆積していた。どの層からも遺物は出土していない。

② 土壙4 (SK-04) (第14図)

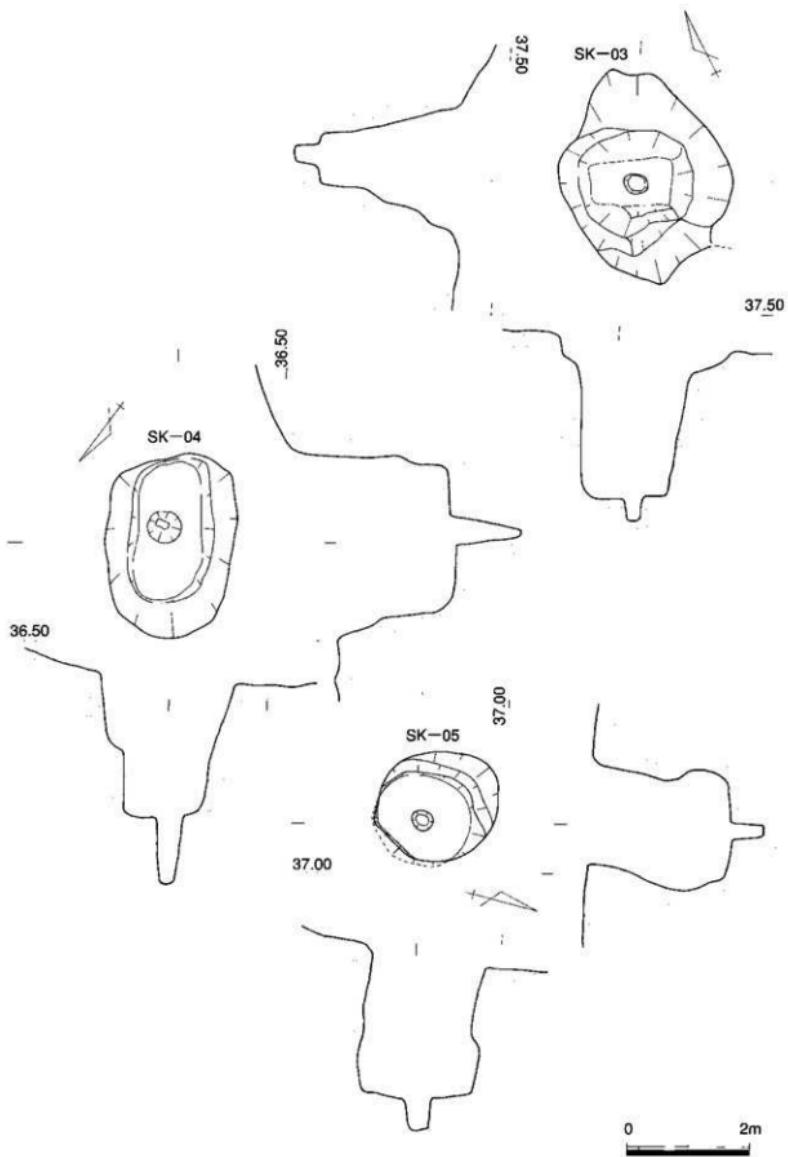
立地・形態・規模 丘陵最高所から西に降った斜面で検出した。上面形・底面形とともに隅丸の長方形である。底面の中央にはピットが穿たれていた。上端1.5×1.1m、底面1.1×0.5m、深さ0.9~1.3m、底面のピット径25cm、深さ55cmを測る。

埋土 検出面の基盤層は橙色粘質土で上層の埋土は鈍い黄色土であった。中層から橙黄色粘質土に変わったため周壁との境が非常に見分けにくく掘削に難渋した。下層は橙黄色砂質土、ピット内は柔らかい暗褐色土であった。どの層からも遺物は出土しなかった。

③ 土壙5 (SK-05)

立地・形態・規模 丘陵最高所から北に降った調査地の北端で検出した。上面形・底面形ともに円に近い多角形である。底面の中央にはピットが穿たれていた。検出面の径約1m、底面径80cm前後、深さ1.1m、底面のピット径15~20cm、深さ25cmを測る。

埋土 検出面の基盤層は黄褐色土、埋土上層から中層にかけては鈍い黄褐色土に若干の炭が混じっているだけのちがいであったので、はじめは遺構としての確信が持ちにくかった。周壁が岩盤に変わっ



第14図 SK-03・04・05実測図

たところで円形土壌として認識した。下層は橙黄灰色砂質土、底面のピット埋土は柔らかい暗褐色土であった。どの層からも遺物は出土しなかった。

③④⑤の性格と時期 3基とも底面にピットがあり、逆茂木を立てるための穴と推測される。各地の調査例で落とし穴とされ、繩文時代の例が多い。③～⑤の上層は出土遺物がなく時期の比定は困難である。ただ住居跡など弥生時代以降の遺構の検出が比較的容易であったのに比べて、特に④⑤の落とし穴は埋土の色調、密度などの点で周囲の土との見分けがつきにくかったのは確かであり、遺構埋没後の時間的経過の中で脱色が進んだり、堆積の密度が高まったりすることがあるとすればこの遺跡で確認した弥生後期の遺構よりもかなり遡ることも考えられる。

④ 溝状遺構（道路状遺構）（第15図）

調査地南端の表上面下で検出したもので、途切れながら17mにわたって続き調査区外にも延びている。上端幅40～50cm、深さ5～10cmである。出土遺物はないが、表土と同様の覆土であるため比較的新しい時期の山道であろう。

⑤ 焼土壙（第16図）

上記溝状遺構に近接して表上下で検出したもので、平面プランは円形、断面形は浅いU字状を呈する。直径約50cm、深さ20cmを測る。検出面の輪郭部のうち北側部分が赤色に固く焼け締まり、内部にも赤色や黄色に焼けた焼土の塊が落ち込んでいた。底面上には炭の多量に混じった黒褐色土が見られた。位置的にはSI-02に重なるが、時期的には溝状遺構に近いものと考えられる。

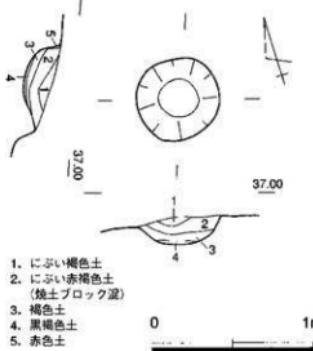
（4）遺構外の出土遺物（第17図）

第17図-18は加工段北側の西向き斜面で出土した弥生土器の底部、19はSI-01上層の堆積上中から出土した磁器碗である。芭蕉文の染付が施されている。

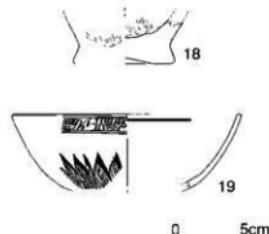
16世紀第2四半期～中頃の中国岱
徳鎮民窯のもので、SK-01、02の
中世墓に関連した遺物の可能性が
考えられる。



第15図
溝状遺構（道路状
遺構）実測図



第16図 焼土壙実測図



第17図 遺構外出土遺物実測図

IV 結び

向山西遺跡では標高38mの丘陵頂部で弥生時代の竪穴住居跡2棟と加工段を検出した。竪穴住居跡SI-01は出土遺物から後期初頭のものと判断できたが、もう1棟のSI-02については覆土上層の遺物しかなかったため、円形の平面プランや周囲を想定しても並存するのに十分なだけの位置関係(9m離れている)を考慮して同時期のものと考え、加工段についてもSI-02の付属施設の可能性と高環脚部の形状から同時期に有り得るものと考えた。ただ、並存していたとしても2棟の竪穴住居跡は円形であることと壁体溝を廻らすこと以外にあまり共通点は見出せない。2棟の概要を次表にまとめておく。

	平面形	直径(m)	床面積(m ²)	主柱穴	壁体溝	中央ピット
SI-01	円形	上端5.0	18(済合)	不明	全周溝	なし
SI-02	円形	上端6.9	34(満合)	6本	不明箇所あり	あり
※屋外への排水路内で合流する。						
—	—	—	—	—	—	—
SI-01	焼土	その他の床面の施設	屋外への排水路	出土遺物	年代	—
SI-02	なし※	小土壙(梯子用か)	あり(規模大)	甕、磨石	後期初頭	—
—	—	—	—	—	—	—
※焼体溝上部堆積土に灰、炭、焼土が相当量混じる。						

遺跡のある丘陵頂部に立つと北側の一部を除けばほぼ四周が見渡せ見晴らしはとてもよい。それだけに吹き付ける風は強く、しかも生活に必要な水場ははるか下方まで降りねばならない。生活に適した場所とはとても思えない丘陵上に住居を構えたのはどういう理由によるものなのか、疑問に思いつつ調査を行った。

本遺跡周辺における弥生後期初頭(V-1様式期)の集落調査例はほとんどなく、右台遺跡Ⅳ区のSI-01があるのみである。右台遺跡Ⅳ区は弥生中期後葉を中心とした集落であり、低丘陵先端部の標高7m以下の緩斜面に立地する。後期前半期まで時期を広げれば勝負遺跡SI-01、福富Ⅰ遺跡5区、廻田遺跡、袋尻E遺跡SI-01(いずれもV-2様式期)などがあり、それぞれの立地は勝負遺跡が標高9mの西向き緩斜面、福富Ⅰ遺跡は標高44mの丘陵頂部から少し下がったところ、廻田遺跡は標高40mの丘陵上、袋尻E遺跡は丘陵尾根の標高75m付近である。

松江市に隣接する安来地域の調査により、弥生時代中期末集落の立地は低丘陵縁辺部にあり、後期になると集落は丘陵上にあがるという結果が出ている。松江市橋南部でも同様のことが言えるようであり、その中でも向山西遺跡は最も初期の事例であるといえよう。丘陵上に上がる背景には可耕地の拡大とともに何らかの社会的緊張があるといわれるが、その内容が具体的にはどういったものなのか今後の調査事例の増加と研究の進展により解明されていくことが望まれる。

(参考文献)

- 松本岩雄・正岡暉大編 1992『弥生土器の様式と編年一山陽・山陰編一』木耳社
池澤俊一 1998『「弥生黒谷Ⅲ遺跡の調査」』『「弥生黒谷Ⅰ遺跡・「弥生黒谷Ⅱ遺跡・「弥生黒谷Ⅲ遺跡」鳥取県教育委員会
川上昭一 2002『谷ノ奥遺跡』八雲村教育委員会

遺物観察表

順位 番号	種類 名稱	出土位置 名稱	上法 (cm) 口幅 容量	形態・文様の特徴	調整		色調	備考
					外側	内側		
7-1	弥生土器 甕	SI-01 第4層	22.2	I 田端陶内側、若干風化 口部部やくぐくの字状に開口	外側 わざかにハケ目痕	内側 風化により不明	黄褐色	
7-2	弥生土器 甕	SI-01 第4層	18.4	口縁部内側、若干風化 口部部やくぐくの字状に開口	外側 ハケ目	内側 風化により不明	明黄褐色	
7-3	弥生土器 甕	SI-01 第4層	底深 7.0	口縁部欠損	外側 ハケ目	内側 頂部以下ハラケズリ	黄褐色	
7-4	弥生土器 甕	SI-01 第2層	底深 6.0	外側 ハラミガキ	内側 ハケ目	黄褐色~灰褐色		
7-5	石器 石刀	SI-01 第5層	長さ 6.0	厚み最大2.4 刃制あり	外側 ナデ	内側 明黄褐色		
9-6	弥生土器 甕	SI-02 上層	7.9 6.5	台または鉢輪部にか 底部上半は中空 脚下部は純やかに聞く	外側 ハケ目	内側 淡褐色	暗灰色	石材未鑑定
11-7	弥生土器 高 平	加工修理土器下層	底径 10.8	内側 角切	外側 ハラミガキ	内側 ハケ目	外側 明黄褐色	
13-8	銅製品	SK-01最下層	残存長 3.8	角切	外側 ハラミガキ	内側 黒色	内側 明黄褐色	
13-9	銅製品	SK-01最下層	残存長 3.0	角切				
13-10	銅製品	SK-01最下層	残存長 2.3	角切				
13-11	銅製品	SK-01最下層	残存長 3.7	角切				
13-12	銅製品	SK-01最下層	残存長 4.5	角切				
13-13	銅製品	SK-01最下層	残存長 4.0	角切				
13-14	銅製品	SK-01最下層	残存長 1.6	角切				
13-15	銅製品	SK-01最下層	残存長 2.7	角切				
13-16	銅製品 I	SK-02最下層	残存長 4.3	角切 本質付着				
13-17	銅製品	SK-02最下層	残存長 4.3	角切				
17-18	弥生土器 甕	西斜面	底径 6.0	平底	外側 ハケ後ナデ	内側	灰褐色~淡黑色	
17-19	縦 縦 染付	SI-01 縦土器上層	14.2	外側に色痕 口内面に斑駁				

図版

図版1



向山西遺跡遠景（南西より）



向山西遺跡遠景（南より）



向山西遺跡調査後（東より）



SI-01全景（東より）

図版3



SI-01
平面プラン検出時



SI-01
堆積土層（南東より）



SI-01
堆積土層（北西より）

SI-01
壁体溝・ピット検
出時



SI-01
屋外への排水路検
出時



SI-01
屋外への排水路縦
断の土層断面



図版5



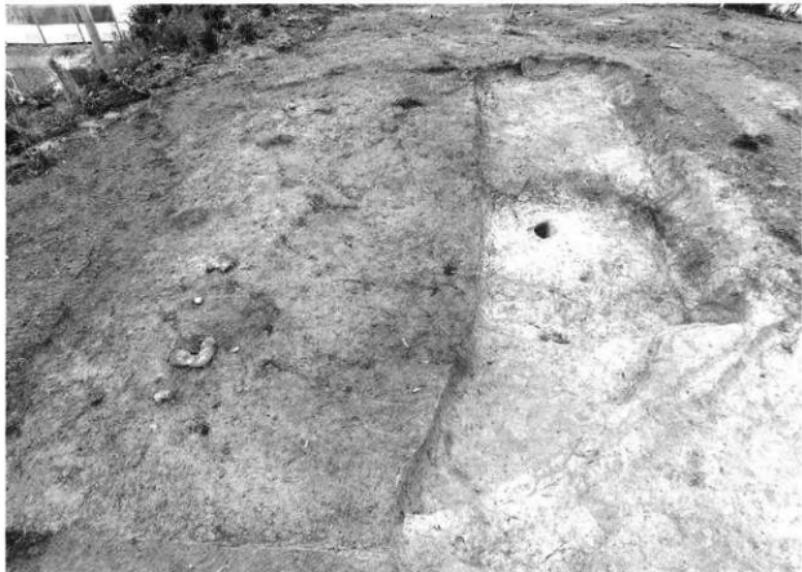
SI-01
屋外への排水路横断
の土層断面



SI-01
内遺物出土状況



SI-01
壁体溝と屋外への
排水路の連結地点



SI-02平面プラン検出時



SI-02全景（北東より）

図版7



SI-02堆積土層断面（東西）



SI-02堆積土層断面（南北）



SI-02
埋土上層の炭・焼
土



SI-02
中央ピット検出時



SI-02
中央ピット堆積土
層断面

図版9



加工段全景



加工段溝内遺物出土状況



SK-01
(中世墓) 半掘時



同上 出土遺物
(炭・釘)

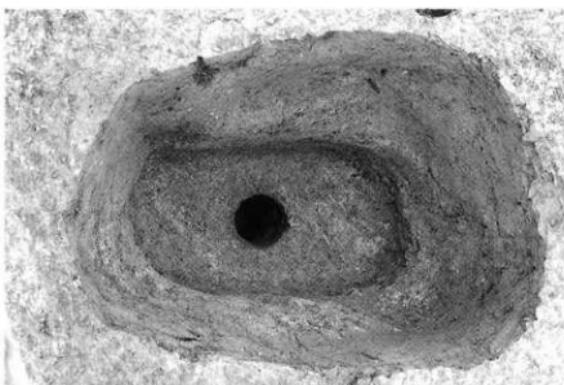


SK-02
(中世墓) 半掘時

図版11



SK-03 (落とし穴)



SK-04 (落とし穴)



SK-05 (落とし穴)



溝状遺構
(道路状遺構)

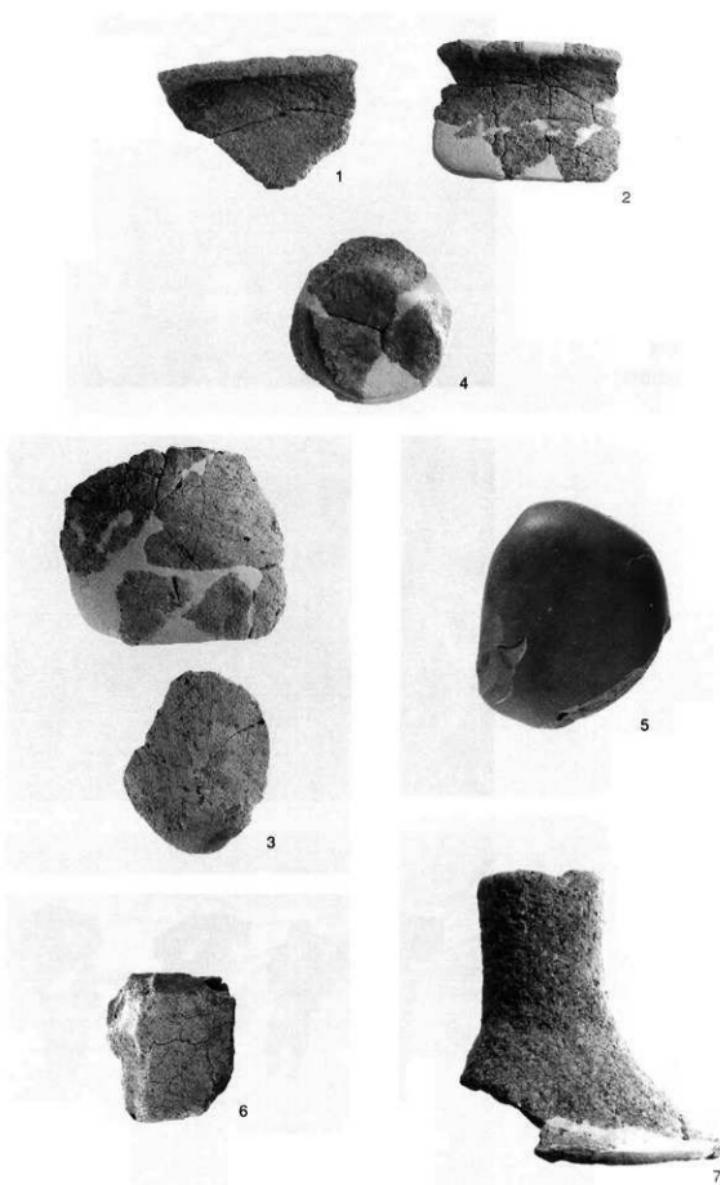


焼土壤

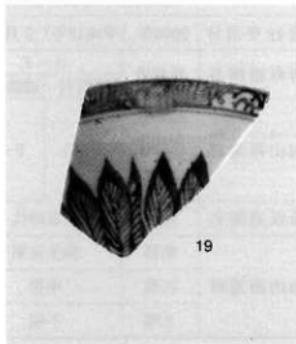
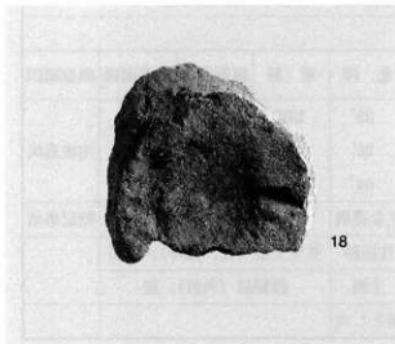
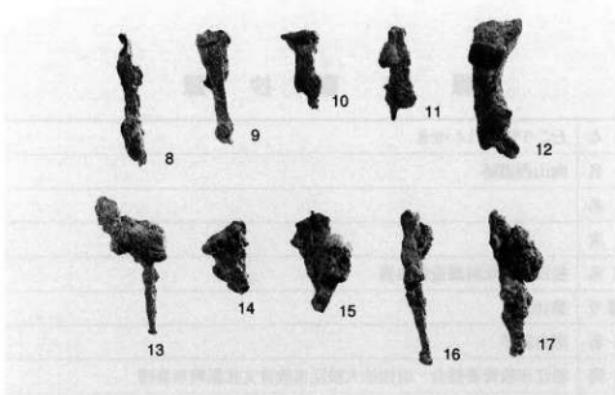


現地説明会

図版13



SI-01・SI-02・加工段出土遺物



報告書抄録

ふりがな むこうやまにしいせき							
書名	向山西遺跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第102集						
編著者名	瀬古諒子						
編集機関	松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団						
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL (0852) 55-5294						
	〒690-0886 島根県松江市母衣町180-21 TEL (0852) 22-8065						
発行年月日	2006年(平成18年)3月20日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	
	市町村	遺跡番号				調査原因	
むこうやまにしいせき 向山西遺跡	島根県 松江市 古志原	32201	F-8	35° 26' 04"	133° 04' 42"	2005.1.4 ~ 3.16	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
向山西遺跡	集落	弥生後期	住居跡	弥生土器(甕、高环)、磨石			
	古墓	中世	土壤	鉄製品(角釘)、炭			
	土壤	不明	落とし穴				

向山西遺跡

2006年3月

発行 松江市教育委員会
財團法人松江市教育文化振興事業団

印刷 株式会社 谷口印刷
松江市東長町902-59